

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県の小学校高学年を対象とした郷土音楽学習の教材化に向けて：
学校現場へのアンケート調査や歌三線指導の実践から見えた課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2016-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 恵美, 石川, 理子, Okada, Emi, Ishikawa, Riko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33226

沖縄県の小学校高学年を対象とした郷土音楽学習の教材化に向けて — 学校現場へのアンケート調査や歌三線指導の実践から見えた課題 —

岡田 恵美* 石川 理子**

Study of Development of Teaching materials for Learning of Okinawa Traditional Music for Fifth and Sixth graders

OKADA EMI ISHIKAWA RIKO

はじめに

90年代以降のグローバル化の加速に伴う、人やモノ、経済の環流によって、日本の社会も確実に変化を迫られている。深刻な少子高齢化や外国人労働者の増加といった社会構造の変化が容易に予測される中で、教育分野においても、国際化に対応できる人材育成、即ち多様な言語や文化的背景を持つ人々といかに協働していける力を育むことができるか、そうした指導の充実が重要視されている。小学校における英語の教科化は、その具体的な取組の一例であり、教育にも変革が求められていることは言うまでもない。こうした多様化する社会の中で主体的に他者と共生し、多様性を尊重できる力と同時に、2008年（平成20）の学習指導要領の改訂以降、大きな柱の一つとなっているのが、我が国や郷土の伝統文化に対する深い理解を育むという理念である。OECDの結果から総合して、日本の子ども達は、他国と比較して、自己肯定感や社会参画に対する意識の低さが指摘されており¹、自立や自信を育む学びが必要とさ

れる中、こうした日本や郷土の伝統文化の学びに関心が向けられている。

音楽科教育においても、こうした日本・郷土の伝統音楽学習は力点が置かれるべき領域であるが、果たして芳しい状況とは言えるのだろうか。実際、琉球大学教育学部の音楽教育専修に入学してくる学生達においても、西洋音楽の演奏技術や理論はある程度身に付けてはいるが、日本や沖縄の伝統音楽に関する知識や経験は入学当初は高い状態とは言えない。例えば、フルートやオーボエの楽器構造やオペラの知識はあっても、龍笛や箏箏がどのような楽器かは見当が付かず、地元沖縄の組踊を観劇した経験がないという学生が大半を占める。勿論、こうした西洋音楽に偏重した日本の音楽科教育の発端は、明治時代の近代化まで遡り、「近代化＝西洋化」という図式の路線のまま長年突き進んできたことに拠るが、ここではその議論は割愛する。

以上のような日本の音楽科教育の現況やその未来に対する問題意識、そして日本・郷土の伝統音楽学習の更なる重点化の必要性から、本研

* 琉球大学教育学部音楽科講師

** 琉球大学大学院教育研究科大学院生

究ではまず沖縄における小学生を対象とした郷土音楽学習に焦点化した。本研究の第一の目的は、沖縄県の学校現場における郷土音楽学習の現状と課題の把握、そして第二に小学生を対象とした郷土音楽学習の教材化の可能性を探ることである。ここでの論点は、小学校教育に歌三線を中心とした郷土音楽学習を取り入れる意義について、そして、そのための望ましい郷土音楽学習教材とはどのようなものかを考察する。

1. 学校教育における郷土音楽学習の現状と課題

1.1 音楽科教育における和楽器指導の重点化

1998年（平成10）告示の中学校音楽科の学習指導要領（第7次学習指導要領）において、「和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること」と具体的に明示されて以降、学校教育における日本や郷土の伝統音楽学習への注力が叫ばれてきた。2006年（平成18）には教育基本法が改正され、2008年（平成20）1月の中央教育審議会による答申では、小、中、高等学校の音楽科改善の基本方針として、「国

際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする。²⁾と更なる進達が強調された。同年3月告示の新学習指導要領（第8次学習指導要領）の中でも、中学校音楽科では「我が国の伝統的な歌唱の充実」と並び、「和楽器を取り扱う趣旨の明確化」が指摘され、実際の小・中学校の音楽科教科書においても日本や郷土に伝わる芸能や伝統音楽が小学校6年間と中学校3年間を通じて題材化されており、小中一貫の9年間の継続性を考慮した構成が組まれた。

2015年（平成27）度から使用される小学校音楽科教科書では、教育芸術社の場合は教科書改訂の柱の一つに「我が国の文化を大切にすることを育む³⁾」が掲げられ、それに関連する学習内容としては、図1で示す通り、低学年では身体的動作を伴う遊びを通して「わらべうた」を学び、中学年では日本各地の郷土芸能や民謡の比較鑑賞、そして高学年では日本の伝統音楽鑑賞が採用されている。特に5年生では箏の演奏法

課程	学年	領域	作品名または指導内容
小学校	第1学年	歌唱	・わらべうた《さんちゃんが》《おおなみこなみ》《おちゃらかほい》の歌唱
	第2学年	歌唱	・わらべうた《ずいずいずいころばし》《あんたがたどこさ》《なべなべそこぬけ》の歌唱
		創作	・わらべうたに合わせた伴奏づくり
	第3学年	鑑賞	・お囃子《神田囃子》《花輪ばやし》《小倉祇園太鼓》の鑑賞
		創作	・3つの音（ラドレ）を使ったお囃子の旋律づくり
	第4学年	鑑賞	・民謡《ソーラン節》《南部牛追い歌》《こきりこ》の鑑賞
歌唱		・ミソラドレの音階でお囃子の旋律づくり ・《さくらさくら》の歌唱	
第5学年	鑑賞	・箏曲《春の海》の鑑賞	
	歌唱 創作 器楽	・《子もり歌》の歌唱 ・ミファラシドの音階（都節音階）を使った旋律づくり ・《さくらさくら》（都節音階）の演奏	
第6学年	歌唱	・古謡《越天楽今様》の歌唱	
	鑑賞	・雅楽《越天楽》の鑑賞	
中学校	3年間	器楽	・箏、三味線、和太鼓、篠笛、尺八の演奏
	第1学年	鑑賞	・箏曲《六段の調》、尺八曲《巢鶴鈴慕》、日本の民謡の鑑賞
	第2学年	鑑賞	・歌舞伎《勧進帳》、文楽《新版歌祭文》、日本の郷土芸能の鑑賞
	第3学年	鑑賞	・平調《越天楽》、能《羽衣》の鑑賞

図1 音楽科教科書（教育芸術社）⁵⁾に見る日本・郷土の伝統音楽に関する教材

が題材化され、6年生においても三味線、三線、尺八、小鼓、和太鼓といった和楽器が紹介されている。また中学校教科書⁴では、第1学年で箏曲や尺八曲、日本の民謡等の鑑賞、第2学年で歌舞伎や文楽、日本各地の郷土芸能の鑑賞、第3学年で雅楽や能といった伝統芸能の鑑賞、そして3年間を通して、箏や三味線、和太鼓、篠笛、尺八といった和楽器の実践を学ぶ内容で構成されている。

中学校での和楽器指導が初めて明文化された第7次学習指導要領（1998年）では、同時に音楽科の必修授業時数も115時間（第1学年45時間、第2学年35時間、第3学年35時間）に縮減されたため、当初は縮減された時数の中で新たな和楽器指導という難題にいかに取り組んでゆくべきかが課題であった。兵庫県立教育研修所の山本による2002年（平成14）の論文⁶では、同年に実施された「全日本音楽教育研究会中学校部会」及び「兵庫県中学校教育研究会音楽部会」の和楽器指導に関するアンケート調査結果を受けて、次のように指摘している。中学校音楽科で使用される和楽器は、比較的発音が容易で短時間で達成感を得やすい「箏」が圧倒的に多く、次に和太鼓、三味線、尺八、篠笛と続いており、したがって使用教材も、《さくらさくら》《六段の調べ》《荒城の月》といった箏で演奏可能な作品が上位を占める。しかしながら、箏は決して安価とは言えない楽器であり、その調査結果においても、実際の学校現場での楽器や教具の不足、楽器管理の難しさなどの環境整備面の問題、そして指導者側の知識や教材不足を補うための研修体系の確立といった問題を、対応すべき課題として挙げている。

指導者研修に関しては、文部科学省主催の「伝統音楽指導者研修会」が東京藝術大学の協力を得て、2000年（平成12）から継続して実施され、その他にも各地方自治体主催の研修会や各大学が提供する教員免許状講習も、近年は和楽器指導研修の場となっている。また音楽教育の研究者や学校現場の音楽教諭によって、様々な和楽器指導の具体的な指導事例や教材化が行われてきている。例えば、箏を用いた実技演奏だけで

はなく鑑賞・創作領域を合わせて多角的な学習を提案する尾藤らの研究や、音楽科授業における長唄の題材化に取り組む本多の研究など、多数の研究発表や学会誌での特集・シンポジウムが行われており、和楽器指導を含む日本や郷土の伝統音楽学習への関心は高いと言えよう。事実、中学校授業に活用可能な和楽器の実践テキストも、箏、三味線、尺八、篠笛、雅楽楽器などが出版されており、また実際の学校現場においても、音楽教諭が事前指導をした上で、地域の邦楽演奏家をゲストティーチャーとして招聘するなど、地域と連携しながら外部講師を積極的に活用している例も少なくない。日本全体を見れば、伝統音楽学習をめぐる環境や選択肢は拡がりを見せつつあるが、では沖縄の学校現場における郷土音楽学習はどのような状況なのだろうか。

1.2 学校現場へのアンケート調査から見た 沖縄における郷土音楽学習の現状と課題

沖縄の小・中学校における郷土音楽学習の状況を把握するため、ここでは、ア) 大学生を対象とした調査、イ) 小・中学校の音楽教諭への調査を、別内容の質問項目で実施した。まず下記に示した大学生へのアンケート調査の結果から考察する。

ア) 大学生へのアンケート調査

（以下、「大学生調査」とする）

対象：琉球大学教育学部 学校教員養成課程
音楽教育専修に在籍する沖縄県出身者
回答数21名

（調査依頼21名 回答率100.0%）

実施：2014年12月

この調査対象は筆者が所属する、琉球大学教育学部音楽教育専修の沖縄県内出身者21名であり、その大部分は沖縄県の小・中学校教員を志す学生である。本調査では、大学入学までの小・中・高校における郷土音楽に関する学習状況や、それに対する問題意識を問う質問項目を設定した。

和楽器学習に関連した質問では、沖縄で最も

親しまれていると言っても過言ではない三線について聞いたところ、有効回答数20名中（無回答1名は除外）、65%（13名）が「大学入学までに三線を習った事がある」、35%（7名）が「大学入学までに三線を習った事がない」と回答した。習った事があると回答した13名中、6名が「小学校または中学校の授業で習った」と答え、その他は学校のクラブ活動、子ども会等の地域活動、教室等の個人指導のいずれかを回答した。興味深い事に、この数値を裏返してみると、20名中の6名を除いた14名、即ち70%の回答者が「小・中学校の音楽授業で三線を学んでいない」と言える。

それでは一体、どのような楽器学習を経験してきているのだろうか。三線以外で学んだ経験のある沖縄の楽器についての質問では、パーランクーが12名、三板が2名、「三線以外に学んだ事がない」が6名、また琉球箏や胡弓、琉球太鼓を選択した者はいなかった。したがって、運動会や体育祭でのエイサーが盛んな沖縄県では、エイサー踊りに不可欠なパーランクーが学校現場でも広く取り入れられている事がわかる。

次に、学校教育における郷土音楽学習について、学生達の意識を知るために次の2つの質問、「Q：郷土（沖縄）に関する音楽を授業の中で扱う必要があるか。」「Q：あなたがもし教員になった時、三線を使った授業を行うか。」を設け、5段階評価「5 とても当てはまる 4 やや当てはまる 3 どちらでもない 2 あまり当てはまらない 1 当てはまらない」を選択の上、理由を明記してもらった。

第一の質問「郷土音楽学習を授業で扱う必要性」については、有効回答数20名中、75%（15名）が「5とても当てはまる」、25%（5名）が「4やや当てはまる」を選択し、下記のような理由が挙がった。

- ・郷土の音楽を知ること、自分の住んでいるところへ意識を向けていかなければいけない
- ・自分の生まれ育った文化を学ぶ必要があるから。自分の郷土音楽を知らないのは恥ずかしい
- ・郷土愛を深めることに繋がる。アイデン

ティティの確立のため（複数回答）

- ・地域と繋がることができるため
- ・学校教育の中でしか生の音楽・楽器に触れられない子もいると思うから（複数回答）
- ・自分達の地域の文化・伝統音楽を知ることによって異文化理解につながる

また第二の「教員になった時に三線の授業を行うか」という質問に関しては、有効回答数20名中、60%（12名）が「5とても当てはまる」、35%（7名）が「4やや当てはまる」、5%（1名）が「3どちらでもない」を選択し、次のような理由を挙げた。

- ・三線という沖縄ではポピュラーな楽器を生徒に体験する機会を設けたい。その役割を担っているのが教師だと思うので、ぜひやりたい（「5とても当てはまる」の回答者、以下同様）
- ・自分が授業で習いたかった、という思いがあるから（複数回答）
- ・沖縄の子が触れたことがないのは可哀想
- ・郷土音楽を学ぶ上で、三線は最も親しみやすい。歌とセットで、奏法が比較的簡単
- ・三線が弾けると正月や盆などでおじいちゃんなどと触れ合うきっかけになる
- ・三線だけではなく、沖縄の箏についても教えたい（「4やや当てはまる」の回答者、以下同様）
- ・楽器の数が確保できればやりたい
- ・やってみたいが実技の技術に自信がない（「3どちらでもない」の回答者）

全体を通して、三線を含む郷土音楽学習の意義を、地域理解や郷土愛、アイデンティティ、伝統の継承、世代を超えた交流と繋げて意識化していることがわかった。また、小・中学校で三線の実技学習を受けていない学生ほど、授業で扱いたいという思いが顕著に現れていた。

沖縄県は、琉球王府時代からの古典音楽や組踊、各地の民俗芸能や沖縄芝居など芸能の宝庫であり、青年会を中心としたエイサーなど地域活動も盛んな県である。しかしながら一方で、現在の沖縄の子ども達を取り巻く環境は、そうした豊かな芸能や地域活動とは必ずしも強く繋

がってはいないようである。事実、2014年度(平成26) 全国学力・学習状況調査では、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」(児童質問紙の質問番号29⁷) という公立児童を対象とした小学生の地域行事参加率を問う質問があるが、沖縄県は全国平均よりも極めて低い全国47位という意外な結果であった。また、習い事として、三線や箏曲、琉球舞踊といった沖縄の伝統芸能を学ぶ子ども達も減少傾向にあり、琉球新報社主催の琉球古典芸能コンクールの応募者の推移を見ても、1995年1931名→2000年1630名→2005年1448名→2010年1114名→2013年961名⁸と全体的な数字が徐々に減っているのは明らかである。したがって次世代への沖縄の伝統芸能や伝統音楽をめぐる状況が、今後好転していくとは言い難いが、だからこそ学校教育における児童・生徒への郷土芸能や郷土音楽への興味付けや、その充実した指導が求められている。

本研究では前述の通り、小・中学校へのアンケート調査も下記の要領で実施した。調査対象の沖縄県中頭地区に属する、宜野湾市、中城村、北中城村、西原町、沖縄市、うるま市、嘉手納町、北谷町、読谷村の小・中学校より、計40校の回答を得た。

イ) 小学校・中学校の音楽教諭へのアンケート調査 (以下、「小・中学校調査」とする)

対象：沖縄県中頭地区の小学校 回答数29校
(調査依頼63校 回答率46.0%)

沖縄県中頭地区の中学校 回答数11校
(調査依頼31校 回答率35.5%)

実施：2014年11月～12月

※以下、数値に関しては少数第2位を四捨五入し、小数第1位で表す

沖縄県の学校教育における郷土音楽学習に関する先行研究は、1994年の県内中学校の状況を調査した大山の論文⁹や、2003年に県内の全小・中学校を対象に調査を実施した津田の研究¹⁰がある。ここでは津田の2003年の調査結果を、2014年末に実施した本アンケート調査と比較検討しながら、現在の学校音楽教育における郷土音楽

学習の状況について考えてみたい。

質問内容は図3で示す通りである。最初の質問(1)では、歌唱活動における沖縄に関連した楽曲の扱いの有無について訊ねた結果、小学校(有効回答数29校)では96.6%(28校)、中学校(有効回答数11校)では54.5%(6校)が歌唱に取り入れていると回答し、更に小学校ではうちなーぐち(沖縄方言)の楽曲を取り入れている学校は72.4%(21校)であった。各小学校で採用されている沖縄関連の歌唱教材について、図2では上位5曲を示している。津田による2003年調査結果と比較すると、ほぼ同じ曲が並んでいるが、《HEIWAの鐘》は沖縄出身の仲里幸広の作曲作詞による2000年の作品であり、教科書への掲載や合唱編曲によって、現在では合唱コンクールの定番曲と言えるまでになっている。《月桃》や《さとうきび畑》と並び、6月23日の慰霊の日や、平和学習の一環として歌われる曲でもある。

うちなーぐちの歌唱教材		ジャンル	
1	ていんさぐぬ花	民謡	16校
2	谷茶前	民謡	3校
3	いったーアンマー まーかいが	わらべうた	2校
3	じんじん	わらべうた	2校
3	安波節	古典/民謡	2校
標準語の歌唱教材		ジャンル	
1	月桃	沖縄歌曲	22校
2	さとうきび畑	沖縄歌曲	5校
2	涙そうそう	沖縄ポップ	5校
4	HEIWAの鐘	合唱曲	4校
4	島人ぬ宝	沖縄ポップ	4校

図2 小学校での沖縄関連の歌唱教材上位5曲

続く質問(2)は、音楽科授業における沖縄楽器の実技指導の有無についての質問であるが、小学校(有効回答数29校)では、「ある」と答えた回答は24.1%(7校)で、その中でも三線が最も多く(6校)、パーランクー(3校)、太鼓(3校)、三板(1校)という順である。ここで三線の実技指導の導入状況に注目してみると、全体の20.7%(29校中の6校)が取り入れているが、この数字は2003年の津田による調査

音楽科授業における郷土（沖縄）の音楽の扱いに関するアンケート

- (1) 歌唱の授業の中で、沖縄に関する楽曲を扱うことはありますか？
 はい いいえ
 ① 「はい」を選択された方に質問です。どのような歌唱曲を扱いましたか？（選択の上、楽曲名を明記）
 うちなーぐちの歌唱曲（例：ていんさぐぬ花、谷茶前といった民謡や古典楽曲）
 標準語の歌唱曲（例：芭蕉布や月桃といったポピュラーな楽曲）
 上記のどちらでもない
- (2) 音楽の授業の中に、沖縄の楽器（三線など）の実技を取り入れていますか？（選択の上、楽曲名を明記）
 はい いいえ
 ① 「はい」を選択された方に質問です。授業で使用した楽器名を教えてください。
 三線（カンカラ三線含む） 琉球太鼓 琉箏 三板
 パーランケー その他
 ② ①で「三線」を選択された方に質問です。授業で使用した楽譜を教えてください。
 工工四 五線譜 楽譜は使用していない その他
- (3) 創作（音楽づくり）で、沖縄をテーマにした音楽（例：海、エイサー、戦争と平和等）を扱うことはありますか？
 はい いいえ
 ① 「はい」を選択された方は、具体的なテーマや授業内容を下記に教えてください。
- (4) 琉球音階を使った創作（音楽づくり）の授業を行ったことはありますか？
 はい いいえ
- (5) 鑑賞教材として沖縄の芸能（組踊や古典音楽等）を扱うことはありますか？（選択の上、芸能名を明記）
 はい いいえ
- (6) 沖縄に関する音楽を、授業の中で扱う必要性はあると思いますか？
 はい いいえ どちらでもない
 ① 上記を選択した理由を教えてください。
- (7) 沖縄に関する音楽を授業で扱ったとき、児童・生徒の関心度は高いですか？
 はい いいえ どちらでもない
 ① 上記を選択した理由や、授業の様子や児童・生徒の反応について教えてください。
- (8) 沖縄の音楽を授業で扱うことの難しさはありますか？（複数選択可）
 楽器の確保 教材の準備 学習内容の選定
 指導の手引となるものが少ない その他 難しさはない
- (9) 授業で扱った沖縄の音楽・芸能を、学校行事へと発展させることはありますか？
 はい いいえ
 ① 「はい」を選択された方は、その具体的な内容について教えてください。
- (10) 御校には、郷土文化に関するクラブ活動はありますか？（複数選択可）
 三線 琉舞 エイサー 空手 方言 その他
 郷土文化に関するクラブはない
- (11) 過去5年間の御校の芸術鑑賞会で、沖縄文化に関する公演は行っていますか？
 はい いいえ わからない
 ① 「はい」と選択された方に質問です。公演のジャンルや公演名、公演団体等を分かる範囲で教えてください。
- (12) 沖縄の文化についての御校での取組みなどがございましたら、教えてください。
- (13) その他、ご意見等がございましたら、下記にご自由にご記入ください。

図3 沖縄県中頭地区小学校・中学校の音楽教諭へのアンケート調査 質問内容

結果と比較すると驚くべき変化を示している。因に2003年の調査は沖縄県全域の小・中学校を対象（小学校回答数115校、中学校回答数86校）としているため、中頭地区を対象とした今回の調査（小学校回答数29校、中学校回答数11校）とは明らかにその母数や規模の異なるものではある。だが、図4で示すように、小学校における三線指導の導入状況に関しては、2003年の69.2%から2014年の20.7%という大幅な減少は無視することはできない。その一方で、中学校においては、和楽器指導の義務付けから三線実技の導入が進んでいることが明らかである。

	小学校	中学校
2003年調査	69.2%	72.5%
2014年調査	20.7%	90.9%

図4 小・中学校での三線指導の導入状況

こうした歌唱や器楽演奏の他、質問(3)~(5)では沖縄に関連した創作活動（音楽づくり、旋律づくり）や鑑賞活動について回答を求めた。質問(4)の琉球音階を用いた創作活動の有無についての質問には、「ある」と答えた回答は小学校では31.3%（29校中9校）、中学校では18.2%（11校中2校）であった。また質問(5)の沖縄の芸能に関する鑑賞活動については、鑑賞活動を行っている学校は、小学校で44.8%（13校）、中学校では63.6%（7校）であり、鑑賞ジャンルは民謡、エイサー、組踊、古典音楽が挙げた。前述の図1で示したように、小学校教科書では日本の五音音階（都節音階や呂陰音階など）に注目した鑑賞や旋律づくりが学習に組み込まれており、その学びの流れで郷土の琉球音階も効果的に取り入れられるのではないかと筆者は感じているが、現状は異なるようである。しかし、2015年度からの小学校音楽科の一部教科書には琉球音階の《谷茶前》が掲載されるため、今後はまた状況が好転する可能性もあるだろう。

次に、指導者側の郷土音楽学習に関する意識について考察したい。質問(6)の郷土音楽学習の必要性に対し、中学校では100%が「ある」と回答し、小学校（有効回答数28校、無回答1を

除く）では、「ある」が92.9%（26校）、「どちらでもない」が6.9%（2校）という結果であった。理由に関しては、大学生調査の結果と同様に、郷土音楽の伝承の必要性や、郷土文化への誇り・郷土愛を指摘する意見が目立った。また、「親世代でも民謡、沖縄ぐちを知らない。学校で三線や沖縄の音階を教えないと伝統継承が、一部（習い事をしている等）のこどもに偏ると思う」と、学校教育で扱う意義を訴えるものもあった。一方、「どちらでもない」を選択した回答理由には「できるならば取り入れたいが、時間が限られているので難しい」「伝統を知ることが大事だと思うが、時数を確保することが難しいので」と挙げられ、時数不足が障壁となっていることがわかる。

続く質問(7)では、指導者側から見て、郷土音楽学習に対する児童・生徒の関心度は高いかという質問に対して、中学校では「はい」が90.9%（11校中10校）、「どちらでもない」が9.1%（1校）、また小学校では「はい」が92.6%（27校中25校）、「どちらでもない」が7.4%（2校）であった。したがって、小・中学校ともに教員は児童・生徒の関心の高さを感じており、その理由について集約すれば、聞き馴染みの薄い本土の伝統音楽・民俗芸能に比べて、沖縄の耳馴染みの良い音楽や身近な楽器である三線に親近感を感じているというものである。また音楽に苦手意識を持っている児童も、郷土の音楽には積極的に取り組むことができるという指摘もあった。

こうした学ぶ側の関心の高さは意識していながらも、実際の指導にはまだまだ課題があることが浮き彫りになっている。質問(8)では沖縄の音楽を授業で扱うことの難しさについて訊ねたが、「難しさはない」という回答は小学校で4.8%（21校中1校）、中学校で9.1%（11校中1校）に過ぎなかった。難しさの理由に関しては、中学校では「楽器の確保」が45.5%（5校）、「指導の手引きとなるものが少ない」が27.3%（3校）と多く、小学校でも同様に「楽器の確保」が90.5%（19校）、「教材の準備」が57.1%（12校）、「指導の手引きとなるものが少ない」が52.4%（11校）と多かった。またこれらに加え、

「時数の確保が難しい」(6校)、「ちんだみ(調絃)に時間がかかる」(2校)という指摘も見られた。三線指導が定着しつつある中学校よりも、小学校での楽器・指導書・教材不足の方が深刻と言えよう。

質問⑫の沖縄の文化に関する各学校の取組みに関しては、小・中学校ともに運動会や体育祭でのエイサーや、平和学習と関連させた合唱・合奏活動を挙げている学校が多い。その他にも、国立劇場おきなわ主催の「生徒のための組踊教室」の利用や、地域ボランティアによるわらべうた指導、地域の青年会によるエイサー指導など、地域や外部と連携した学習活動や、地域の偉人や歴史を題材とした創作音楽劇に取組む学校もあり、学校や音楽教諭の取組み方次第で、郷土音楽学習には学校間での格差や隔たりが生じているようにも見える。最後の自由記述では、たくさんの意見や要望が寄せられ、その一部を抜粋して紹介する。

- ・音楽の授業時数が少なくなったことで、運営が大変厳しくなった。教師が沖縄音楽に関心を寄せなくなったらますます厳しい状況になるだろう。
- ・指導者不足だと思う。本校は専科がないので更に厳しい。担任が沖縄教材を扱う教材の準備や指導は無理だと思う
- ・三線の一曲弾けることに喜びを感じ、授業の後も自宅でじいちゃんやばあちゃんの三線を借りて練習し、購入して続ける児童もいた。学校教育の中で郷土の音楽を扱う良さを感じた
- ・アンケートを通して、あまり郷土の音楽を授業で取組んでいないことが分かり、気付かされた
- ・沖縄音楽に関する小学生向けの教材があると嬉しい。①わらべうたの楽譜とCD(特に手遊び歌のお薦めが紹介されていると嬉しい)、②琉球音階に関する指導案(ゲストティーチャー活用等)
- ・方言を取り入れた歌の指導法、音楽を通してことばの意味・表現を更に研究したい。講師の先生や講座があると嬉しい

・組踊についてのDVD、生徒向けのDVD(説明付き)+問題集があるとぜひ利用したい
ここまでアンケート調査結果を中心に考察し、沖縄における郷土音楽学習の状況や課題が浮かび上がってきた。郷土音楽学習においては、検定済教科書やそれに付随した指導書・視聴覚教材が予め用意されている訳ではない。したがって、教材選定や教材研究は勿論のこと、時には小学生や各学年に合わせた教材の編曲なども必要となり、指導者側の音楽的知識や能力が求められる部分も大きい。上記の教員からの意見にもあるように、そうした郷土音楽学習のゼロからの授業設計や実際の指導は、音楽専科不在の小学校では非常に難題であるのは想像に難くない。そのために必要な郷土音楽教材とは、どのようなものが提案可能だろうか。また学校教員養成の役割を担う大学側は、どのような取組みをしていくべきであろうか。次節では、2014年7月に筆者が学生と共に開講した、小学生対象の歌三線入門講座を中心に取り上げ、郷土音楽学習の具体的な指導教材や指導法について考えてゆく。

2. 小学生対象の歌三線講座プロジェクトからの考察

2.1 小学生夏休み歌三線入門講座の実施

琉球大学教育学部音楽科では、郷土音楽学習に関連した科目として、実技系科目では「伝統音楽演習Ⅰ」があり、沖縄県では中高教員採用試験の2次試験に三線実技(《安波節》の演奏)が含まれていることもあって、この半期の必修科目では三線の実技指導が行われている。続く「伝統音楽演習Ⅱ」は、2014年度は箏の実技を筆者が担当した。また講義系科目では、「音楽史各論(日本・琉球音楽史)」の中で、組踊や沖縄の民謡、民俗芸能についての授業を行っている。教員養成課程に準じたカリキュラムとして大学側ではこうした授業を提供してはいるものの、実際に郷土音楽学習の指導法を検討し、授業構成を試案するような授業科目はない。学生の中には問題意識を持って、卒業研究で郷土音楽学習について扱う学生もいるが、その他は実技や知識は一応習得してはいるが、その指導

を楽しむことを授業のねらいとした。続いて《かえるの合唱》や《きらきら星》の演奏を通して、受講者が工工四や指の押さえ方にも慣れてくると、簡易演奏版の《ていんさぐぬ花》を練習して第1日目の講座は修了した。受講者全員に三線は貸出を行ったため、次回授業では全員が「自宅で練習をしてきた」と意欲的に取組んでいる様子が窺えた。第2日目は「三線で民謡を演奏してみよう！」と題し、三線で前回までの曲を復習した後、三線の歴史や楽器素材に関するクイズ、歌詞の意味や琉歌形式を学び、全員で即興琉歌を作って歌唱した。最後に《安里屋ユンタ》を練習した後、ちんだみ（調絃）の練習を全員で行った。最終日は、「三線マスターになろう！」と題し、これまでに学んだ曲を演奏した後、《安里屋ユンタ》の練習を続けた。途中、三線が使用される沖縄の芸能について、民謡の《谷茶前》や《鳩間節》、古典の《かぎやで風節》の生演奏を取り入れると同時に、各々の芸能の画像を観ながらクイズ形式で紹介した。最終日の最後には演奏発表会を設け、大学生の聴衆や保護者を前にして、受講者が三線や太鼓の演奏を行った。

講座修了後の受講生へのアンケート（回答者5名）では、「Q：三線の工工四が、ひとりでも読めるようになりましたか？（選択肢 1 読めるようになった 2 よくわからない）」に対して、全員が「読めるようになった」を選択し、「Q：三線の工工四には、使う指によって色がついていましたが、どうでしたか？（選択肢 1 とてもわかりやすかった 2 わかりやすかった 3 ふつう 4 わかりにくかった）」という問いに関しても、「とても分かりやすかった」が4名、「わかりやすかった」が1名であり、今回考案した教材への工夫が功を奏したと言えるだろう。また「Q：どうしてこの三線講座に参加しましたか？（選択肢 1 おかあさんや家族にすすめられたから 2 三線をひいてみたかったから 3 その他）」という質問に関しては、全員が家族からの薦めによる参加であることがわかったが、「Q：三線講座を受けてみてどうでしたか？（選択肢 1 とても良かつ

た 2 よかった 3 ふつう 4 よくなかった）」との問いには、全員が「とてもよかった」を回答した。「Q：三線講座の中で、良かったことを教えて下さい。」という質問については、『かえる節』や『きらきら星節』『ていんさぐの花』などが全部ひけるようになって良かったと思います」「初めの練習に比べて、みんなと音を合わせられるようになったこと」「最初は全然ひけなかった三線が、むずかしい『安里屋ユンタ』までひけるようになった」（以上5年生の感想）、「三線でひいたことがない曲を全部ひけたので良かったです」「とくいになったことがふえて、おばあちゃんにきいてもらえる（三線は、おばあちゃんにはじょうず）」（以上4年生の感想）といった回答があった。

更に「Q：この三線講座の中で、良かったことや興味を持ったことを教えて下さい（複数選択可）」という質問に対しては、「三線をひいたこと（5名）」「三線の歴史について勉強したこと（3名）」「三線が使われる芸能について勉強したこと（3名）」「琉歌をみんなでつくったこと（2名）」「三線についての〇×クイズ（1名）」という結果であった。「Q：沖縄の芸能に前より興味をもちましたか？（選択肢 1 とても興味をもった 2 少し興味をもった 3 とくにかわらない 4 きらいになった）」という質問では、「とても興味をもった」が4名、「少し興味をもった」が1名、また最後の質問「Q：もっと三線をならってみたいと思いましたか？（選択肢 1 はい 2 いいえ）」では、全員が「はい」を選択した。これらの結果や講座の中で児童たちが楽しみながら積極的に三線に取り組む姿から、特に三線の演奏技能の習得や曲が弾けるようになったという達成感が大きいことが窺える。また三線に関連した歴史や沖縄音楽の諸要素、沖縄の芸能を、実技と合わせて総合的に学ぶことによって、郷土音楽への関心・興味付けに効果があったことがわかる。三線に親しみがない親世代が多い中、児童の感想にも見られたように、学校授業で扱うことによって祖父母世代との音楽や芸能を通じた交流も期待できるのではないだろうか。

2.2 小学校高学年を対象とした郷土音楽学習の教材化に向けて

ここまで、小・中学校へのアンケート調査や大学側で開講した歌三線講座から、小学生を対象とした郷土音楽学習について考察してきたが、冒頭でも掲げた本研究の第一の論点、即ち、小学校教育に歌三線を中心とした郷土音楽学習を取り入れる意義について、そして第二の論点、そのための望ましい郷土音楽学習教材とはどのようなものか、以上をここでは考えてみたい。

小学校の現場における三線指導の導入状況に関しては、既に言及した通り、2003年調査の69.2%から2014年の20.7%という大幅な減少を見せ、また大学生調査においても回答者の70%が小・中学校の音楽授業の中で三線を学んでいないという結果が出ていることから、好転的な状況とは言いがたい。事実、沖縄の楽器の導入に関しては、小学校では打楽器のパーランクーが多いが、三線や箏のような旋律楽器は音色やリズムは言うまでもなく、音階の学習にも役立つ。特に三線は、比較的奏法が易しく、基礎的な奏法と工工四の読み方さえ習得すれば、児童が主体的に学習を広げていくことの可能な楽器である。そうした切掛けづくりは無論早い時期に越したことはなく、小中学校一貫教育という学びの継続性が重要視されている中で、小学校授業に三線を取り入れる意味があるのではないだろうか。また祖父母世代との交流や、地域活動への参加という点においても、三線という楽器は十分な媒介と成り得るのである。

小学校での郷土音楽学習の充実や歌三線指導の導入に際して、大きな障壁となっているのが、先のアンケート結果で示したように、楽器の確保、教材の準備、指導の手引きとなるものが少ない、時数不足という問題であった。こうした問題を打破し、課題を解消していくためには、現場だけではなく、教員養成の大学側でも教材開発などの研究を推進していくべきであり、時数の見通しがきくような授業案やそのための教材（テキスト、指導書、視聴覚教材）の充実が求められる。

その具体的な取組みはこれからであるが、小学校音楽科における郷土音楽学習の教材開発に

あたって、重要な要素をここでは明記し、整理しておきたい。第一は、これまで言及してきているように、高学年における歌三線の導入である。そして第二に、教科書に掲載された題材とそれに関連した沖縄の題材の比較学習の導入である。小学校高学年の教科書では、都節音階を使用した旋律づくりが題材化されているが、これを琉球音階と関連づけてより豊かな創作活動に結びつけることのできるような教材も必要である。特に、日本や沖縄の音楽の特徴を感じて味わうためには、五音音階という音階要素の理解は重要である。実際、大学の授業においても、2014年度から箏を活用し、教科書に掲載されている《越天楽今様》（民謡音階に調絃）、《さくらさくら》（都節音階）といった本土の作品、そして《安波節》（呂音階）や《瀧落菅搔》（律音階）といった沖縄の古典曲を琉球箏曲の奏法を通して学ぶ授業を行っている。音楽専科でない教員においても、教科書の題材から郷土音楽学習の題材へと繋げていけるような充実した教材が必要であり、また本土と沖縄の題材を繋げることによって各々の特徴の理解も深まるであろう。

そして第三に、実践と知識が結合する学びを重要視し、表現活動（歌唱・器楽・創作）といった実践においても題材に関する知識を習得することで、より豊かな学びになるような教材が必要である。題材に即した視聴覚教材の作成や知識を効果的に習得・応用できるような指導法の工夫が求められる。

終わりに

本研究では、音楽科教育における日本・郷土の伝統音楽学習の重点化の必要性から、沖縄における郷土音楽学習に焦点化してきた。アンケート調査結果の考察を通して、沖縄の学校現場における郷土音楽学習の現状を理解し、そこから浮き彫りになった課題や、大学側での小学生を対象とした歌三線講座の企画・実施経験から、まずは歌三線指導を取り入れた小学校高学年対象の郷土音楽学習の教材開発の必要性が見えてきた。今後の具体的な取組みとしては、第一にこの教材開発研究の推進が挙げられる。教

員が一人で授業可能なテキスト、指導手引書、視聴覚教材が必要であり、また歌唱・器楽活動のみではなく、鑑賞や創作活動を実践と知識を融合させ得るような内容が望まれる。

そして第二に、将来の教員を養成する立場の

大学側でも、地域連携型の児童を対象とした郷土音楽学習講座の企画・運営を活性化させ、将来的な現場での応用を視野に入れた実践力のある教員を育てていくことが求められる。郷土音楽学習に関連した既存科目の内容充実は勿論、

はじめての三線 いち・に・のさんしん!



琉球大学 教育学部
三線プロジェクト2014
「班大生と歌三線を派しもう!」

はじめての三線 いち・に・のさんしん!

- 三線のかまえ方 2
- ポジションの練習①~③ 3
- ポジションの練習④~⑦ 5
- かえる節 7
- きらきら星節 9
- ポジションの練習⑧~⑩ 11
- ていんさぐの花 13
- 三線のチューニング 15
- ていんさぐの花 上級編 16
- 安里屋コング 21
- テンヨー節 26
- 三線について学ぼう! 29

作成: 琉球大学 教育学部 民間研究室
三線プロジェクト2014

三線のかまえ方



ポイント①
ココを
ひく!

ポイント②
ちょっと手前に
握ろう!

ていんさぐの花の歌謡は、琉球になつていもー

8字

ていんさぐの花や 爪先に揉めて 顔のよし事や 肝に揉めれ

8字

爪先を揉めば揉めれば 顔のよし事や 胸めやならん

8字

爪先を揉めば揉めれば 顔のよし事や 胸めやならん

6字

爪先を揉めば揉めれば 顔のよし事や 胸めやならん

ていんさぐの花

三線の練習

① 中 中 尺 〇 四 合 四 工

② 中 中 六 〇 七 〇 六 七

①を3回▼②を1回▼①を2回繰り返してみよう!



ていんさぐの花

4	3	2	1
四	中	四	中
合	中	合	中
四	六	四	尺
工	〇	工	〇
中	七	中	四
尺	〇	尺	中
〇	六	〇	中
四	七	四	尺
合	中	合	〇
四	尺	四	中
工	〇	工	〇

三線について学ぼう!

1. 三線のはじまり



14世紀ごろ、中国から三弦が日本に伝わる。

16世紀ごろ、琉球王国に伝わる。

14世紀ごろ、中国から三弦が日本に伝わる。

16世紀ごろ、琉球王国に伝わる。

2. 琉球王国に三線が誕生!



三弦を琉球王国独自の楽器、三線にアレンジ!

○ 中国から伝わった三弦は琉球でアレンジされて三線として広がり、琉球音楽に大きな影響を与えました。当時の琉球の人々は、日常生活で使ったことや感じたことを歌謡で表現していました。しかし、三線が伝来すると、今度は三線のメロディーにのせて歌を歌うようになりました。

○ また、三線は1560年ころに琉球から、商人を通じて大阪に伝わります。日本本土では、三線を改良し三味線として広まっています。



三線について学ぼう!

1. 三線のはじまり



14世紀ごろ、中国から三弦が日本に伝わる。

16世紀ごろ、琉球王国に伝わる。

○ 当時、琉球は中国に対して、中国の皇帝へ貢物を送ることで、自分から貢物を送る。朝貢制度がありました。そのため、中国から様々な品物や文化が伝わり、琉球の文化に大きな影響を与えました。その一つが三弦です。

図6 小学生夏休み歌三線入門講座のために作成した教材 (部分抜粋)

今後は小学校教員を目指す学生達にも歌三線実技といった郷土音楽学習の授業を提供できるような体制にしていかなければならない。

謝 辞

本研究のアンケート調査にご協力頂き、貴重なご意見や資料をご提供くださいました沖縄県中頭地区の小学校・中学校の先生方へ心より厚くお礼申し上げます。

- 1 文部科学省中央教育審議会「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」2014年（平成26）11月20日
- 2 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』2008年（平成20）6月、4頁。
- 3 教育芸術社『平成27年度 小学生の音楽1～6 内容解説資料』2014年、5頁。
- 4 中学校音楽科教科書は2015年1月現在、2012年度（平成24）版が最新版である。
- 5 教育芸術社『平成27年度 小学生の音楽1～6 内容解説資料』2014年、36～47頁。
- 6 山本茂之「中学校音楽科における和楽器の指導に関する研究」『平成14年度研究紀要第113集』兵庫県立教育研修所、2002年、7～14頁。
- 7 国立教育政策研究所「平成26年度全国学力・学習状況調査 回答結果集計 [児童質問紙] 沖縄県-児童（公立）」https://www.nier.go.jp/14chousakekkahoukoku/factsheet/prefecture/47_okinawa/47p_a.pdf（2015年2月25日閲覧）
- 8 琉球新報社『第48回琉球古典芸能祭 第3回八重山古典芸能祭』琉球新報社、2013年、150～152頁。
- 9 大山伸子「沖縄県の中学校における郷土音楽導入の現状と方向性」『沖縄県立大学芸術紀要 第2号』、1994年、45～75頁。
- 10 津田正之「沖縄県の小・中学校における郷土音楽学習の現状と課題—音楽担当教諭へのアンケート調査を手がかりに—」『琉球大学教育学部紀要 第64集』2003年、149～176頁。